JAPAN HONG KONG

飛龍 FLYING DRAGON

日本香港協会ニュース No.112

50年の歴史に幕　『香港街道地方指南』

NPO法人日本香港協会（東京）会員　田村 早苗

ハンディタイプの香港地図『香港街道地方指南』（以下『指南』）が、発刊から50年の節目の2026年1月版をもって刊行を終える。「寝耳に水」と言いたいところだが、昨年版は刊行見送り、加えて昨今の紙媒体全体の著しい退潮をみるに「ついに指南も」という言葉のほうがふさわしくも感じる。

15年ほど前、「『指南』好きが高じて会社訪問」的な企画に誘われて版元の通用圖書有限公司にうかがったこと、当時の社長が温かく対応してくれたことが懐かしく思い出される。その通用圖書がほぼ毎年発行した『指南』の歴史は1970年代に遡る。学校教材に適切な香港の地図がほしいという教育現場の声から地図づくりを始めた同社、壁掛け式などの商品を出したのちに冊子型の『指南』を発刊した。1977年のことだ。

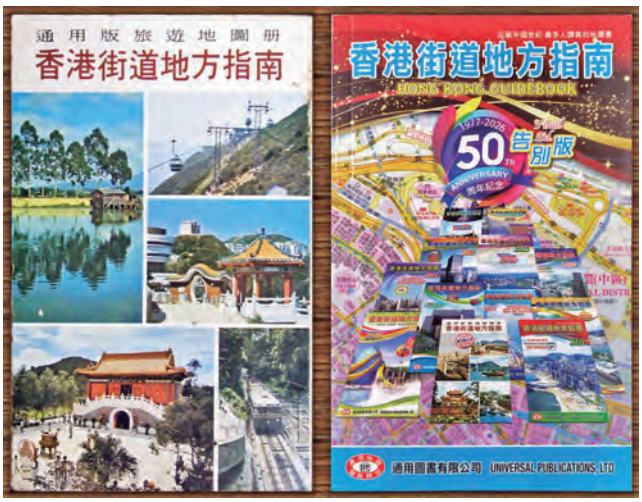
細かく書かれた通りの名前と番地、ビルの名前。バスの路線は赤線に路線番号、トラムは緑の線。鉄道駅には出口位置と番号、ミニバス乗り場、タクシースタンド、公共トイレの場所もマークされている。巻末には交通路線図や英中文両方の索引もあり、香港居住者や旅行者にとってまことにありがたい一冊だった。サイズは手に納まりやすい約119×190ミリ、日本でいう四六判に近い。ちなみに「四六」の呼称は明治の世に英国から日本に輸入された紙の寸法を尺貫法で表したことに由来するそうで、サイズは英国風であったのかと改めて知る。

年版の定期刊行物をなくすことには大きな決断が必要になるはずだ。道や建物その他のデータベースは常に更新を続けないと情報の空白部分ができてしまい、「やはりもう一度つくるか」と思ってもその空白を取り戻すのは至難の業だ。

どうする、『指南』。「告別版」と銘打たれた最終号を見ていると、巻末に「告別宣言」というあいさつ文を発見。愛読者への感謝を述べたあと、こう結んである。

「『香港街道大廈詳圖』（現在32版）は毎年出版を続けるので変わらぬご愛顧を」

『大廈詳圖』の掲載項目は『指南』とほぼ同じ。サイズは一回り大きくかつハードカバーで持ち歩きには不向きだが、『指南』のエッセンスは残るわけだ。地道なデータ収集作業はこれからも続くということで一安心。あいさつの行間に、社長の笑顔が見えた気がした。



『香港街道地方指南』初回号と告別版

2026年5月 発行（禁無断転載）

目　次

50年の歴史に幕　『香港街道地方指南』……1
香港の老舗魔法瓶ブランド「CAMEL」が日本上陸……2
パンダを見たくなったらオーシャンパークへ！……3
藍塘道（ブループールロード）の坂を、もう一度
——閉校する香港日本人学校香港校を訪ねて——……4
私と香港ビジネス……6
連合会・各協会便り
全　国：香港ビジネスセミナー「香港と共に創る新たなビジネスチャンス」開催……7
東　京：第25回通常総会開催……8
関　西：香港フォーラム参加／チャイニーズ・ニュー・イヤー・パーティー開催／2026年度総会開催……9
中　部：新年情報交換会　開催報告……10
九　州：春節セミナー＆パーティー2026開催報告……11
山　形：2026年春節セミナー・レセプション開催報告……12
北海道：春節のつどい2026開催／北海道日本香港協会 理事会を開催……13
宮　城：2026春節セミナー＆パーティーを開催
広東語教室の春節パーティーを開催……14
沖　縄：春節・香港ビジネスセミナー 2026 in 沖縄　開催
香港M+　香港の新たな芸術拠点……15
広　島：香港市場調査・香港広島県人会との交流会
春節意見交換会・香港ビジネス相談……16
新　潟：第26回香港フォーラム2025へ参加して……17
高　知：春節セミナー／よさこい高知文化祭2026……18

香港の老舗魔法瓶ブランド「CAMEL」が日本上陸

NPO法人日本香港協会（東京）会員　隅田 香織

香港には長い歴史を持ちながら、今も人々の生活の中で使われ続けているブランドがいくつもあります。そのひとつが「CAMEL（駱駝牌）」です。

CAMELは1940年代に香港で創業した、老舗の魔法瓶ブランドです。香港では日常生活で使われているのはもちろん、結婚式の伝統的な儀式「敬茶」（新郎新婦が両家の親族や年長者にお茶を差し出す儀式）でも、このCAMELの魔法瓶が使われることもあるそうで、とても歴史があります。

香港好きの人の間では、香港旅行でこの魔法瓶を買うことがちょっとした憧れのようになっています。ただ、少しハードルが高いのも事実です。というのも、昔ながらの製法で作られているCAMELの魔法瓶はガラスの内瓶を使っていて、とても繊細。日本へ持ち帰る途中で割れてしまいそうで、私もずっと購入を躊躇していました。同じように感じている方もいらっしゃるのではないでしょうか。そんなとき、昨年9月に東京で開催された東京インターナショナル・ギフト・ショーで、CAMELが日本で展開されることを知りました。オンラインストア開設に先駆け、10月に日本で先行販売がスタートし、念願だったCAMELの魔法瓶をついに購入。実際に試して、その使い心地の良さに驚かされました。

日本でも昭和の時代には、各家庭にガラスの魔法瓶がひとつくらいはあったのではないでしょうか。今はステンレスボトルが主流で、気軽に持ち歩ける便利なものが多くなりました。手軽さではステンレスボトルの方が上かもしれません。でもCAMELの魔法瓶を使ってみると、昔ながらのものづくりの良さを改めて感じます。まず、お湯が本当に冷めにくいこと。そしてもうひとつ印象的だったのが、飲み物の味でした。同じお茶でも、ステンレスボトルで飲む時とは少し違い、味移りが感じられず、飲み物本来の味わいを楽しめます。長く受け継がれてきた製法には、きちんと理由があるのだと感じました。それ以来、ほぼ毎日のようにこの魔法瓶を使っています。



現在も販売されている婚礼敬茶用ボトル



日本販売開始で売り切れ続出のデザイン

もうひとつ印象的だったのは、伝統を守りながらも、時代に合わせた変化を続けているところです。昔ながらの製法やデザインを大切にしながら、使いやすいサイズやカラー、デザインのバリエーションが多く展開されています。なかでも「香港らしさ」を感じられるデザインが多いのが特徴です。例えば、香港の大スター、ブルース・リーをモチーフにしたデザインや、大ヒット香港映画『トワイライト・ウォリアーズ 決戦！九龍城寨』とのコラボレーションなど、香港のカルチャーを感じさせるシリーズも登場しています。また、香港のイラストレーターや香港トラムウェイズなど地元企業とのコラボデザインもあり、思っていた以上にバリエーションが豊富で驚かされました。

さらに興味深いのが、九龍湾にあった自社工場跡地をリノベーションし、2017年にCAMLUX HOTELを開業されたことです。このホテルでは、ロビーにCAMELの歴史や昔のデザインのボトルが展示されているほか、最新作やボトル以外のグッズ販売も行っています。館内には魔法瓶を使ったライトなどの装飾もあり、CAMELの世界観を感じられる空間になっていました。

CAMELは創業85年を迎えた今も、香港に自社工場を持ち、香港での製造を続けています。老舗企業やメーカーが時代の変化の中で姿を消していくことも少なくない昨今ですが、そんな中でCAMELのように伝統を守りながら変化を続ける企業が香港に存在していること、とても嬉しく思います。

日本でもこのような香港ブランドが少しずつ知られ、日常の中で親しまれていくことを期待しています。

隅田香織／香港情報サイト「香港ウンチク話」管理人。香港の街歩きやローカル文化、日本で楽しめる香港情報などをテーマに発信。

パンダを見たくなったらオーシャンパークへ！

NPO法人日本香港協会（東京）会員　武田 信晃

全世界に約2,500頭がいると言われているパンダ。和歌山のアドベンチャーワールドにいた4頭のパンダが2025年6月に、上野動物園の2頭が2026年1月に中国に返還され、54年ぶりにパンダが日本からいなくなりました。不在を嘆いても仕方ありません。パンダを見るなら、香港の海洋公園（Ocean Park / オーシャンパーク）やマカオのジャイアント・パンダ館に行くことをおすすめしたいと思います。

特にオーシャンパークは、2024年8月に誕生した姉の「加加（Jia Jia）」と弟が「得得（De De）」の双子、父の「楽楽（Le Le）」、母の「盈盈（Ying Ying）」の家族がいるほか、2024年9月にオスの「安安（An An）」とメスの「可可（Ke Ke）」もやってきて、現在、6頭が飼育されています。

実は盈盈が出産した時は19歳となる誕生日の前日。人間でいうと約57歳の初産でした。中国側と海洋公園側としては、パンダは高齢であることから妊娠は難しいと判断し、新たなパンダを受け入れることを決めたと思われます。その後、サプライズで双子が生まれたため、結果的に6頭になったようです。



盈盈と遊ぶ子どもたち

◆それほど並ばずにパンダに出会える

オーシャンパークでもパンダは人気です。大勢の人がパビリオンに詰めかけた時に入場制限がかかることはありますが、何時間も並ぶことはほとんどありません。内部は、パンダが生息する里山をできるだけ再現しています。客からみるとけっこう急な上り坂になっているので、大勢の人がいても見やすい環境になっています。

パンダは、木に登ったり、ブランコがあるのでそれで遊んだり、ご飯を食べたり、寝ていたりと無邪気な姿を見せてくます。

同パーク内には、「熊貓薈（Club Panda）」というパンダをテーマにした中華料理店もあります。点心、海南雞飯、台式牛肉湯米線（台湾スタイルの牛肉が入ったライスヌードル）などが食べられます。お土産店は、もちろん、パンダグッズがめじろ押し。ぬいぐるみ、キーホルダー、バッグ、Tシャツなどあらゆるものがグッズとして販売されていますので、多すぎて迷ってしまうかもしれません。



可可の様子

◆パンダの飼育は並大抵のことではない

パンダが飼育されている施設の最大のミッションは、それぞれの知見を生かしてパンダ数を増加させることにあります。筆者は、2014年に当時のパンダの飼育員に取材をしたことがあるのですが、取材メモを押し入れの奥から引っ張り出してみました。

メモによると、パンダの発情期は、年に1回で、期間も3月～6月と短い。普段は別々に過ごし、ホルモンバランスなどの状態をチェックして、ベストと考えられるタイミングで3日間一緒に過ごさせます。

上述のように盈盈の初産は19歳の誕生日の前日ということですから、どれだけ妊娠させるのが難しいのかがわかります。逆にいえば、発情期以外の時の健康の維持も大きな挑戦です。例えば、食事1つにも気を使っていて、主食の竹や笹は、1回5キロを6回に分けて与えます。栄養バランスを考えて、野菜や果物も混ぜます。笹もいろいろな種類があり5～9種類を広東省から取り寄せ、貯蔵庫にはスプリンクラーを使って常に水分がある状態にし、室温を4～7度に設定して管理しているそうです。

また、犬・猫を飼ったことのある人ならわかると思いますが、爪を切る時、嫌がって手を引っ込めてしまい、切るのに苦労する場合があります。パンダも同じで、爪を切るための訓練もします。

傍から見ると飼育員はパンダのそばにいて楽しそうと思われがちですが、彼らの努力があってこそ、私たちがパンダを見られるということです。

中国本土以外で、6頭のパンダを同時に見られるのはオーシャンパークだけです。香港観光がてら足を運んで損はないと思います。



しっかり管理されている笹

藍塘道（ブループールロード）の坂を、もう一度

――閉校する香港日本人学校香港校を訪ねて――

香港沙龍電影有限公司／サロンジャパン株式会社　汪 アンドリュー

2026年3月末、香港日本人学校香港校が閉校し、大埔校に統合されることとなった。これに先立ち、3月21日に卒業生を対象とした校舎見学会が開催された。700人超の希望者が殺到し、世代ごとに区切った4部制での実施となった。1980年代に在籍した筆者も参加した。以下は、その日の記録である。

通っていた校舎がなくなるとき、私たちの記憶はどこに行くのだろう――。

◆再会と坂道

銅鑼湾（コーズウェイベイ）の飲茶の店に日本と香港から5人が集まった。かつての同級生たち。蒸籠をつつきながら、昔話が止まらない。今日は校舎のお別れ会だ。私たちは13時半の回に振り分けられていた。1982年、私は香港のローカル幼稚園を出て日本人学校に入学し、中3までの9年間を香港校で過ごした。その後、ニューヨークの高校に進んだ。校舎がなくなると聞いて、当時の同級生たちと、もう一度、あの坂を上りに来た。

利園（リーガーデン）から乗ったUberの窓の外に、同じ坂を上る人が増えてくる。皆スマホを片手に、遠目から建物を写真に収めている。角を曲がると学校の入口の階段が見えた。下校時、坂にはスクールバスがずらりと並んでいた。さくら、あさかぜ、こだま、つばめ――学校所有のバスには日本の新幹線や特急から取った名前がついていた。それだけでは足りないからチャーターバス1号、2号、3号と続く。行き先別に校門の前に連なるあの光景。下校時刻になるとバスの列はどこまでも伸びていた。

1980年代初頭、世界最大の日本人学校はシンガポールで、香港は2番目だったそうだ。ほどなく香港がシンガポールを抜く。私が小学校に入学したときは、1年生だけで7組もあった。学年が上がるにつれ中学受験組が帰国し、生徒の数は少し減る。それでも廊下はいつも子どもたちであふれていた。体育館での集会には、1,500人近くがあの空間に集まったのだ。運動会は学校の外でやった。会場は毎年、先生がくじを引きに行って決まる。香港仔（アバディーン）に当たるとラッキーだった。学校から近いのだ。九龍側になると啓徳空港が近く、航空機の轟音で放送がまるで聞こえない。毎年、皆で香港仔の開催を祈っていた。

◆校舎の中へ

校舎に足を踏み入れる。事務室の場所は変わっていなかった。ただ、きれいになっている。増改築も行われ、全体的に、記憶していた校舎よりもずいぶんと明るい雰囲気だ。湿気でところどころ剥げてはいるものの、白く塗られた壁がまぶしい。階段の手すりの緑色だけは、あの頃と同じままだった。入ってすぐのところに、当時、大きな水槽があった。熱帯魚が泳いでいて、なぜか歴代の校長先生がその世話をしていた。代が替わっても、また次の校長が魚に餌をやっている。引き継がれていた仕事だったのだろうか。誰もやらないから校長がやっていただけだったのだろうか。子どもの頃は気にもしなかったが、今となってはそんなことが少し気になる。

廊下では鬼ごっこで走り回り、ミニ四駆を走らせた。先生方は休み時間になると職員室に消えるから、廊下は走り放題だった。その廊下が、こんなに短かっただろうか。天井だけは記憶よりも高く感じた。もともとあった天井板を外して、配管をむき出しにしたのかもしれない。

一番驚いたのは図書室だった。かつての音楽室を飲み込み、さらに隣の教室も取り込んで、2階もぶち抜きの空間になっていた。見上げると吹き抜けの天井が高い。



新館増築前の校舎の姿（1985年、香港日本人学校撮影）と、増築された現在の香港校の姿（渣甸山の中腹から筆者撮影）



前から2列目、左から3番目が筆者

あの頃の図書室はずっと小さくて、薄暗くて、本の背表紙がぎっしり並んでいた。自分たちの頃にこんな図書室があったら、もっと本を読んだだろうか。いや、たぶん走り回っていただろう。音楽室は図書室に吸収されていた。別の部屋に代わっただけかもしれないが、当時の音楽室は、もうそこにはなかった。小学生時代は吹奏楽部だった。あの音楽室でフルートを吹いていた。その部屋が、今は本棚の一部になっていた。

教室も見て回った。家庭科室と理科室は同じ場所にあった。水回りの配管があるから動かせなかったのだろう。階段の位置も、トイレの位置も変わっていない。けれどそれ以外の教室はすっかりシャッフルされていて、かつての6年生の教室は別の部屋になっていた。黒板はホワイトボードに替わり、プロジェクターがついている。今風の教室だ。6年1組と6年2組だった私たちは、クラスごとに分かれて、プチクラス写真を撮った。増築された校舎の上階に上がると、窓から香港の街が一望できた。山の斜面に張り付くように広がるビル群。その向こうに海。当時はこの部分の校舎がなかったから、自分が知っている眺めは山側か道路側かのどちらかだった。この景色を毎日見ていた今の生徒たちが、少しうらやましい。



正面玄関。象徴的な階段は当時の姿のまま

◆小さくなった校庭、大きくなった山

校庭は当時、上下2段に分かれていた。下にジャングルジムと砂場、上でドッジボールやバスケットボール。ボールがフェンスを越え川に落ちると、立入禁止の斜面を降りて拾いに行った。今は一面のグラウンドだ。今日は、誰もが同じことを口にしていた。記憶の中ではもっともっと校庭は広かったのだ。兄弟姉妹で通っていた家庭が多く、「誰々のお兄ちゃんじゃない？」と言えば記憶が繋がる。1時間の見学時間を終えた私たちは、正面階段の前で学年ごとに集まり、近しい学年に誰かの兄弟姉妹を見つけては、カメラマンをお願いし合ってかわるがわる記念撮影をした。

学校を後にし、誰かが言った。「渣甸（ジャーディン）山に登ろう」。校舎裏の渣甸山展望台。体育やマラソンの練習で何度も登らされた山だ。窓からいつも見えていた。小学生の頃は山の広場まであっという間だった。大人の足では中腹で息が上がり、ほぼ全員がそこで挫折した。校庭は小さくなったのに、山だけは大きくなっていた。


校庭

◆場所が去る日

学年が終わるたび、約束をした。「何年後の何月何日、東京駅の銀の鈴に集まろう」。なぜか、目印は、銀の鈴だった。結束の強かった私たち5年4組は、返還の年の5月4日。1997年5月4日、大学生になった私たちは本当に集まったのだ。担任の園（その）先生は京都からまだ小さな赤ちゃんを抱え、新幹線で東京にやって来た。クラスの半数以上がいた。

海外の日本人学校は不思議な場所である。子どもの多くは親の転勤で3年か4年で去る。先生方も3年で入れ替わる。誰もがいつか去ることを前提に集まり、別れには慣れているはずだった。けれど今日は違う。人が去るのではない。場所が去るのだ。人には再会がある。しかし場所は——なくなったらもう二度と会えない。

帰りのバスで5人は、もう昔の話をしなかった。誰かが仕事の話を始め、それから今晩の予定のことを話した。感傷を避けているのだと、全員がわかっていた。3月の香港。窓の外で、鳳凰木（ほうおうぼく）がオレンジの花をつけて揺れていた。学校のPTA冊子は確か「鳳凰木」という名前だった。あの花は、まだ咲いている。



汪アンドリュー／1975年米国生まれ。1982～91年、香港日本人学校に9年間在籍。2002年、慶應義塾大学大学院修了後、日本航空株式会社勤務を経て、2019年香港に拠点を移す。香港沙龍電影有限公司にて映画制作、サロンジャパン株式会社にて香港映画の配給を手がける。

私と香港ビジネス

NPO法人日本香港協会（東京）理事　小柳 淳

◆名古屋から始まった香港ビジネス

20世紀最後のころ、私鉄で観光需要開発を考えていたのですが、将来的な人口減が予想されそれならば需要を海外に求めようと考えました。インバウンドどころか、訪日旅行さえ「ホーニチって何語なの？」と問われるようなムードのなかで小さなプロジェクトが発足し、私がその担当課長となりました。

そんなとき、JNTO（日本政府観光局）の開催する海外旅行会社とのビジネスマッチングに参加をしました。1999年4月、開催地はナゴヤドーム（当時）。多数の小会議室にセラーである国内観光事業者が配置され、多くは宿泊、テーマパークなどで私鉄は我々だけだった気がします。幸い、バイヤー何社もが我々の部屋にも来てくれました。箱根・江の島へのルートやキップ類の説明をし続けました。その中で気づいたのはバイヤーの行動様式がかなり異なることでした。日本式のスケジュールにうまく合わせてくれるのが台湾、あくまで自分たちのペースでマッチング時間も遅れるし用が済むとすぐ切り上げるのが香港でした。こういったことが新規市場開発を始めた若い社員中心のわがチームに快い衝撃を与えてくれました。

◆小さな案内所から

インバウンド認知度が非常に低い時期でしたので、まずは目に見える拠点を持とうと新宿駅構内に外国人向け案内所をオープンさせました。1999年8月1日のことです。開店初日朝にドキドキしながらシャッターを開けると、すぐに海外からのお客さまがいらっしゃり一同ホッとしました。この案内所を宣伝して集客の拠点としました。

開業当時は年間訪日者443万人と今の十分の一くらいです。中国には観光ビザの発給がない時代です。開業から5年くらいは来訪者数のトップは香港で、30％程度を占めていて周囲から「小柳さんが香港好きだから香港のお客さまが多い」などと言われたものです。しばらくの間は香港、台湾、韓国が上位を占めていました。またアメリカ、カナダ、オーストラリアからの方にも香港出身の人がみられ、いろいろな事情から移民した人がいることを実感しました。

交通機関の営業・案内所ということもあり、ご利用者は圧倒的に個人旅行者です。そのため、宣伝販促についても工夫をしました。教科書的資料も熟読しましたが、そのなかで個人旅行者誘致に効果的な方法だけを厳選しました。特に注力したのは、消費者に直接届く販促とメディア戦略でした。各地で開催される旅行博に出展し、海外出張の際はコンビニや書店で旅行ガイドなどを買ってきたのもそのためです。手もとに集まった本の奥付に記載されている編集部宛に、プレスリリースを何度も郵送しました。香港の出版社から「なんで私たちのことを知っているの？」といった返信が来たこともあり、徐々に掲載されることが増えました。これらを通じて台湾や香港で出版される繁体字出版物が相互に流通していることに気づきました。



開業時の案内所のPR画像。背中がモデルの筆者


鏡開きと乾杯。左から2人目が鄭伊健、右隣が筆者

◆インバウンド拡大と相互交流

2008年には国の機関として観光庁が設立されました。その政策の中でインバウンド勃興期に努力した者を顕彰するVISIT JAPAN大使（当初はYŌKOSO! JAPAN大使）に選ばれ、初期の努力が報われた気がしました。翌年は「2009日本香港観光交流年」とされ双方で観光施策を充実させてゆくことになります。1月には観光庁長官が訪港し、オープニングセレモニーが開催されました。それに招待され鏡開きの一員となりましたが、お隣は香港スターのイーキン・チェン（鄭伊健）で少し会話する機会があったのは素敵な想い出です。

その後、コロナ禍の数年を除き訪日旅行者は増加の一途をたどり、2025年には年間来訪者が4,268万人を記録しました。

このプロジェクトが始動するときに参加した名古屋でのことです。香港の旅行会社の若い女性に「unfairじゃない？」と問われました。当時の日本はノービザで入国できる国・地域が非常に少なく、香港人はビザが必要だったのに対して日本人はノービザで香港入境できたからです。ビザは観光誘致をしたい側が免除することがあります。それから四半世紀が経ち、日本も観光誘致のためビザを免除する国・地域が大幅に増え、香港を含め多くの地域と相互にビザなし訪問ができるようになり平和な交流人口が拡大しました。

香港貿易発展局　東京事務所長　伊東 正裕

香港ビジネスセミナー「香港と共に創る新たなビジネスチャンス」開催

3月2日、香港経済貿易代表部（東京）（ETO）は、香港貿易発展局（TDC）と香港投資促進局（IHK）との共催で、ホテルオークラ東京において「経済・貿易ワンストッププラットフォーム（Economic Trade Express Platform）」事業の一環としてのビジネスセミナーを開催しました。セミナーには、ビジネス、学術、メディア、クリエイティブ各分野の代表者ら約250名が参加し、香港のビジネス上の優位性や政府の新年度予算案で発表された施策に耳を傾けました。

日本香港協会からは、全国連合会の佐藤征洋会長、東京協会の野島威副会長、守永俊一副会長、小柳淳理事、内貴淳史理事、中江隆比古理事、萩原伸一理事、勝又英博監事、原田光夫名誉顧問、脇田誠顧問、近藤修事務局長、関西協会の戒田真幸会長、宮城協会の高橋洋人事務局長とペギー・タン青年部長、新潟協会の大島和憲事務局長が列席しました。



（左から）杉山泰教次長、ウィンサム・アウ首席代表、ベンジャミン・ヤウ首席代表、レオ・ツェー次席代表

セミナーの冒頭で挨拶した香港経済貿易代表部（東京）のウィンサム・アウ（欧慧心）首席代表は、日本が香港にとって6番目に大きな貿易相手国であると説明、香港と日本の間の物品貿易額が昨年3,360億香港ドルに達し、前年比9.2%増加していると述べました。また、現在約1,500社の日本企業が香港で事業を展開していることについて触れ、日本が香港において形成されている最大の海外ビジネスコミュニティであること、日本企業が香港のビジネス環境に抱く信頼を十分に反映している点を強調しました。

アウ首席代表はさらに、香港は高度に開放されたビジネス環境を維持しているだけでなく、積極的にインフラを強化し、都市全体の競争力を高めている点について触れ、海外企業が香港を活用してアジア地域で事業を展開するための有利な条件を兼ね備えていると説明しました。

続いて登壇した香港貿易発展局のベンジャミン・ヤウ（游紹斌）日本首席代表による「ニューフロンティアの創出」と題したプレゼンテーションでは、香港と日本の経済連携強化における同局の積極的な役割を強調、アジア金融フォーラム、アジアグローバルヘルスサミット、フードエキスポPRO、国際ジュエリーショーなど、香港で開催される一連のハイレベル国際会議と大型国際展示会などの旗艦メガイベントを紹介しました。



セミナーに参加した香港ビジネス関係者

その後、インベスト香港（香港投資促進局）東京の杉山泰教次長による「新たな香港の役割と日系企業の展望」と題したプレゼンテーションにおいて、香港が「一国二制度」の枠組みのもと、独自の優位性つまり接続性、国際化、多様性、包摂性といった強みを引き続き有していることについて言及しました。さらに、税制の改善策や新規資本投資家受け入れ制度の実施など、ファミリーオフィス開設を推進するための政府の多面的な施策についても説明しました。

さらに、香港経済貿易代表部（東京）のレオ・ツェー（謝智浩）次席代表が、「香港の新たな価値を解き放つ」と題して登壇し、香港がアジア地域における知的財産（IP）取引センターとしての役割を果たしていることに触れ、知的財産取引と資金調達活動を推進するための政府の継続的な取り組みについて概説しました。また、アジアのイベント首都としての香港の最新動向についても触れ、新設のカイタック・スポーツパーク（啟德體育館）において、数多くの主要スポーツ・エンターテインメントイベントが開催されてきたことについて紹介しました。さらに、同パークのメインスタジアムは2025年のチケット売上高で世界第3位、総収益では世界第5位を記録、売上高・総収益ともにアジア地域ではトップの座にある点についても言及しました。

プレゼンテーション終了後は、参加者全員が、ホテルオークラ桃花林の中華フルコース料理を堪能し、積極的に情報交換や相互交流を深めました。



主催団体である香港ファミリーメンバーの集合写真

TOKYO

NPO法人日本香港協会（東京）　事務局長　近藤 修

第25回通常総会開催

桜の開花を間近に迎えた3月16日にNPO法人日本香港協会の第25回通常総会が「アルカディア市ケ谷」で開催されました。当日は総会に先立ち、日中投資促進機構の岡豊樹代表理事・事務局長に「最近の中国事情―日米中の情勢を踏まえた企業の事業戦略―」と題してご講演いただき、日米中の経済的立ち位置を、他国の対中政策を踏まえながらお話しいただくと共に、　中国がASEANのマーケットに注力している点等、詳しくお話しいただきました。昨今の厳しい日中関係の中で、日本企業が中国とのビジネスで突破口として協働可能と思われる分野は、医療・介護など両国が問題を抱えている分野ではないかとのお話をいただき、皆さん大変興味深く、示唆に富んだご講演を熱心に聴いていました。



岡豊樹代表理事・事務局長の講演

当日、会場には、正会員、理事、法人会員（オブザーバー）合計42名の方が出席され、委任状は事前に170通提出があり、総会の開催要件を充足していることより、総会は成立。議長は定款に基づき佐藤会長が務め、事前に会員の皆様にお配りした総会資料に基づき、各議案を各担当理事が説明して、第1号～第6号の全議案が審議され、各議案とも賛成多数で承認されました。この度の総会では年会費の改定議案を5号議案（2027年度から正会員は1,000円値上げの7,000円、法人会員は10,000円値上げの60,000円）として提出いたしました。この第5号議案については書面評決で数名の方の反対意見がありました。年会費改定（2027年度からの値上げ）は9年ぶりとなりますが、その間、物価、人件費の他、郵便代、印刷代等諸経費の値上げがあり、協会の目的に則した新しい活動も必要であるとの意見を踏まえ、年会費の改定議案を提出しました。年会費値上げについては、総会に先立つ2月の理事会でも活発な討議をした結果、値上げ幅は最小限に抑えようという意見が多く、前述の値上げ幅になりました。第6号議案では今まで長く協会活動に尽力のあった佐藤会長、野島副会長、桜井理事、山内理事の4人が退任し、新しく脇田、冼、飯田、森内の各氏が理事に就任しました。



佐藤議長の進行による総会



乾杯挨拶（左から内貴副会長、守永会長、笹部副会長）



新理事（左から森内理事、脇田理事、飯田理事、冼理事）

総会の後に臨時理事会を開催し、新体制の会長には守永副会長が選出され、新しく笹部理事と内貴理事が副会長に選出され、一連の公式行事は予定通り終了。総会の後開催されたレセプションは和やかにご歓談いただく中、無事終了しました。



新旧会長・副会長、新旧理事の面々

関西日本香港協会　事務局

香港フォーラム参加

2025年12月2日、3日の日程で開催された香港フォーラムに関西から14名の会員が参加しました。女性会員の参加者が9名で、女性会員の積極的な参加が目立ちました。12月1日には香港フォーラム会場隣の中華料理店ビクトリア・ハーバー・スプリームで参加者全員出席の前夜祭が盛大に開催され、全国連合会の総会の後、美味しい中華料理を楽しみながら、皆さん親しく交流しました。関西から参加したシンガーソングライターの海賀千代さんが今年も歌ってくれました。彼女の素敵な衣装は、田島等副会長が校長と学園長をしている上田学園の社内コンペで優勝した素敵な衣装でした。



香港フォーラム

香港フォーラム初日の12月2日は、午前中に香港がグローバル市場に進出する戦略拠点になっている様子を学び、午後にはテーマ別セッションで香港経済の未来を活性化させる創造的な思考を学びました。ウェルカムディナー前の1時間半、香港のボンド・グループのアンソン・チャン会長が彼のクルーザーに招待してくれてハーバー内を遊覧しながらの船上カクテルパーティーを楽しみました。船から見た香港の景色は素晴らしく、貴重な経験でした。九龍の中華料理レストランで開催された香港ビジネス協会世界連盟主催のウェルカムディナーは、大火事で亡くなった香港の人達を悼み、食事の前に全員3分間の黙祷から始まりました。

翌日の12月3日は、アンソン・チャン会長の妹リリー夫妻が中華料理で夕食接待してくれました。兄弟で接待してくれた経験から、香港人は人とのご縁を大切にしていることを学びました。帰国日の午前中には、香港貿易発展局が主催した住宅のデザイン展を見学し、素晴らしい展示に圧倒された次第です。

よく学びよく遊んだ有意義で楽しい香港フォーラム参加でした。

チャイニーズ・ニュー・イヤー・パーティー開催

2月27日に中国料理「錦城閣」にて春節パーティーを開催したところ、昨年より多い57名の参加者で盛会でした。パーティーは戒田会長の開会挨拶で始まり、香港貿易発展局のリッキー・フォン大阪事務所長が歓迎挨拶をされ、田岡事務局長の音頭で会食が始まりました。美味しい春節特別料理をいただきながら、皆さんが積極的に親しく交流されたので、賑やかで楽しい宴会になりました。恒例のラッキードローは、昨年より多い42本の景品が提供され、田島副会長の名司会で大いに盛り上がりました。最後に田島副会長の挨拶で閉会になりましたが、今年こそ飛躍の一年にしたいとの我々の思いが参加者に通じて、元気でエネルギーに溢れる素晴らしい宴会になりました。



チャイニーズ・ニュー・イヤー・パーティー

2026年度総会開催

3月10日に香港貿易発展局の事務所がある大阪国際ビル16階の会議室で18名の参加者を得て2026年度の総会を開催しました。総会前の30分、コーヒーとクッキーをいただきながら協会役員と会員の交流会を実施したところ、お互いに打ち解けた良い奮囲気になり、総会の5つの議題が順調に承認されました。戒田会長と議事内容の説明を行った田岡事務局長の発言から、昨年会費値上げを行い財務内容が大幅に改善したので、今年は新規会員の獲得に注力する方針が述べられました。



総会前の交流会

中部日本香港協会　事務局

新年情報交換会　開催報告

中部日本香港協会にとって、2026年で最初のイベントとなる新年情報交換会を、2月26日に開催いたしました。

今回の会場は名古屋の栄エリアにあるTHE CONDER HOUSEです。旧名古屋銀行本店として長い間地域に親しまれた、歴史的価値を有する建築を保存・改修しているレストランであり、「日本建築家協会優秀建築選100作品」などの賞を多数受賞しています。銀行建築として外壁全体を石張りとした古典的な意匠が用いられており、その外観から香港の金融街を思い起こす方がいるかもしれません。建物の中もシックで重厚感溢れるインテリアが施されており、非日常感を楽しめる華やかな空間が広がっていました。



山本雄彦氏を講師にお招きしたセミナー

この特別な会場に、中部日本香港協会の法人会員ならびに個人会員にくわえて、来賓としてお招きした中華人民共和国駐名古屋総領事館の領事2名にもお越しいただき、総勢約30名が集結しました。越智成幸会長が開会のご挨拶で参加者の皆様に謝意を表し、平松賢介事務局長による司会で新年情報交換会の幕が上がりました。

今回のイベントは大きく3つの内容で構成され、新春記念のビジネスセミナー、アトラクションのNEW YEAR コンサート、懇親会の順に進行していきました。

まず、新春記念のビジネスセミナーでは、香港貿易発展局のビジネスアドバイザーとしてもご活躍される株式会社DREAM CUBEの山本雄彦代表取締役にご登壇いただき、「香港市場の現在地と中部地方からの勝ち筋」と題した講演が行われました。香港市場で中部地方の強みをどのように生かせるかを説く熱のこもったお話に、参加者は耳を傾けていました。



NEW YEAR コンサート

続いて、アトラクションとして実施されたNEW YEARコンサートでは、愛知県を拠点にご活躍されるバイオリン奏者の伊東かおり様と、ハープ奏者の高田知子様による演奏が行われました。クラシックの名曲をはじめ、中国のヒット歌謡曲や参加者の手拍子とともに演奏されるアップテンポの曲などをご披露いただき、参加者の顔には自然と笑みがこぼれました。

その後、リッキー・フォン理事が香港式の挨拶で参加者を歓迎し、志賀重介副会長による乾杯の音頭とともに懇親会が始まりました。会場ではモダンチャイニーズをコンセプトとするコース料理が提供され、参加者の皆様には美味しいお食事と交流を深めるお時間をお楽しみいただきました。

最後に、岩崎篤雄理事が音頭をとる中、参加者全員による一本締めが行われ、会は盛大に締めくくられました。



九州日本香港協会　事務局長　チェ・キョンミ

春節セミナー&パーティー2026開催報告
― 香港市場から見る九州のインバウンド戦略 ―

2026年3月13日、福岡市・ソラリア西鉄福岡にて、九州日本香港協会と香港貿易発展局の共催による「春節セミナー&パーティー2026」が開催されました。九州・香港両地域から多彩な関係者が集い、新年の節目を祝うとともに、経済・観光・人材交流の今とこれからを共有する場となりました。

◆特別講演

セミナーの中核となった特別講演では、インバウンド戦略研究所の清水泰正代表が登壇し、「香港市場の最新トレンドと九州に求められるインバウンド戦略」について解説しました。講演ではまず、香港市場は単なる訪日市場ではなく、日本の観光戦略の方向性を先取りする“成熟市場”であると位置づけられました。人口規模は限定的でありながら、1人当たりの旅行支出額が高く、訪日旅行における消費単価の高さから、質の高いインバウンド市場として重要な位置を占めています。



インバウンド戦略研究所清水泰正代表による特別講演

また、香港人旅行者はリピーターが多く、訪日経験を重ねる中で「より深い体験」を求める傾向が顕著となっています。これにより、従来の観光地巡りから、地域文化や生活に触れる体験型観光へとニーズが移行していることが指摘されました。特に重要な変化として、「モノ消費からコト消費へ」の移行が挙げられます。買い物中心であった訪日旅行は、現在では食文化や地域体験へと重心が移り、「その地域でしか得られない価値」が旅行先選定の決定要因となっています。中でも「食」は最も強い訪日動機であり、日本食への高い信頼が、観光と輸出の双方を結びつけています。香港での日本食体験が訪日につながり、さらに訪日体験が現地での消費へと還元されるという、双方向の好循環が形成されている点は大きな特徴といえます。

一方で九州においては、訪日客の多くが福岡に集中しており、他地域への周遊が十分に進んでいないことが課題として示されました。今後は九州全体としてのブランド構築や、地域間連携による滞在価値の向上が不可欠となります。さらに、「〇〇といえば〇〇」という明確な地域イメージの確立が重要であり、食材や季節性、地域固有の体験を軸とした発信が求められています。地方においては、むしろ競争優位を築く余地が大きく、戦略的な情報発信が鍵を握るとされました。

本講演を通じて印象的であったのは、インバウンドを単なる観光施策としてではなく、食・地域産業・輸出と一体で捉える視点でした。香港市場は、観光と消費が密接に結びつく構造を持ち、九州にとっても戦略的に活用すべき重要なパートナーであると強く感じられました。

続いて、香港貿易発展局より香港のビジネス環境や支援施策について紹介があり、九州企業にとっての活用可能性が示されました。

◆懇親会

第2部の懇親会では、参加者同士の活発な交流が行われるとともに、ラッキードロー抽選会も実施されました。本抽選会では、味珍味有限公司、西日本シティ銀行、福岡銀行、JTB福岡支店、西研グラフィックス、正興電機製作所、岩尾磁器工業、はせがわ、康僑国際（香港）、レイナ、九州旅客鉄道の計11社より合計29点の景品が提供されました。有田焼のマグカップやワインカップ、ワイン、焼酎、オリーブオイル、カタログギフト、ギフト券、食事券など多彩な品々が用意され、当選者の発表ごとに会場は歓声と拍手に包まれました。こうした協賛各社のご協力により、交流の場は一層活気あるものとなりました。

本イベントを通じて、香港は単なる訪日市場ではなく、日本の地域戦略を磨く上での重要な示唆を与える存在であることが改めて認識されました。

九州日本香港協会としても、今回の取り組みを契機に、九州と香港をつなぐ実践的かつ持続可能な交流基盤の強化に引き続き取り組んでまいります。


景品授与後の記念写真

YAMAGATA

山形日本香港協会　事務局

2026年春節セミナー・レセプション開催報告

2026年2月7日、山形日本香港協会主催の春節セミナーおよび春節レセプションが、山形グランドホテルにて開催されました。本イベントは、山形県、山形市、山形県国際経済振興機構、山形商工会議所、山形商工会連合会といった多くの団体より多大なるご後援を賜り、当協会の会員をはじめ、山形の経済を担う多くの皆様にご出席いただきました。

最終的な参加者は総勢39名で、セミナーに33名、レセプション35名の活気あふれる交流の場となりました。本稿では、熱気に包まれた当日の様子を詳しくご報告いたします。

◆第一部・第二部：山形ブランドの現在地と「香港フェア」の熱気

大沼みずほ会長による開会挨拶でセミナーの幕が開きました。冒頭の第一部講演では、山形県産業労働部県産品・貿易振興課の管毅課長より「香港への県産品の輸出支援について」と題し、県の戦略的なバックアップ体制について具体的な解説をいただきました。

続く第二部では、昨年の香港インターナショナル・ワイン＆スピリッツ・フェアへの出展を振り返るパネルディスカッションが行われました。パネリストには、山形県酒造組合の佐藤一良会長、千代寿虎屋酒造の大沼寿洋社長、秀鳳酒造場の武田秀和社長という、山形の酒造りの中核を担う方々をお迎えしました。



パネルディスカッション

大沼会長をモデレーターとした討論では、現地での「山形ブランド」に対するリアルな反応が共有されました。「実際に足を運んだからこそ、香港市場が洗練されていることと、山形の酒に対する期待値の高さが分かった」という力強い言葉とともに、単なる輸出に留まらない、現地消費者のライフスタイルに踏み込んだマーケティングの重要性など、今後の海外展開における未来戦略が浮き彫りとなりました。

◆第三部：香港の最新動向とビジネスの最前線

第三部では、香港貿易発展局の伊東正裕東京事務所長より「香港の最新動向と日本企業の進出状況」についてご講演いただきました。激動するアジア情勢の中で、香港が依然として日本企業にとっての重要なゲートウェイであること、そして最新のビジネス環境について、俯瞰的な視点から貴重な知見を共有いただきました。



大沼みずほ会長を囲んで

その後、会員による総会・理事会が執り行われ、次年度に向けた組織の結束を固めました。

◆春節レセプション：至高の一献「山形讃香」が彩る祝宴

会場を8階アルカスへ移し、いよいよ春節レセプションがスタートしました。

冒頭、吉村美栄子山形県知事、佐藤孝弘山形市長（いずれも代読）より温かい祝辞を賜り、山形県酒造組合の佐藤一良会長による力強い乾杯の発声で宴が始まりました。

今回のレセプションの主役を飾ったのは、何と言っても山形県酒造組合様よりご協賛いただいた、山形県産日本酒の最高峰、山形讃香（やまがたさんが）です。山形讃香とは、厳しい品質基準をクリアし、山形県が世界に誇る吟醸王国の威信をかけて世に送り出す最高級ブランドです。県産の酒造好適米「雪女神」を精米歩合35％以下まで磨き上げ、卓越した技術で醸されたその味わいは、まさに芸術品。参加者からは「これほどまでに澄み渡り、奥行きのあるお酒は他にない」と驚きと感銘の声が上がり、会場全体が芳醇な香りに包まれました。この貴重な一献が、出席者同士の会話に花を添え、山形と香港のさらなる連携を誓い合う素晴らしい演出となりました。

◆結びに代えて

今回のイベントを通じて再確認したのは、山形には世界に通用する確かな「本物」があり、それを支える人々の情熱があるということです。香港という窓を通じて、山形の魅力がさらに世界へ広がっていく。その歩みを止めることなく、当協会はこれからも皆様とともに挑戦を続けてまいります。

最後になりますが、ご多忙の中ご登壇いただいた講師の皆様、貴重なお酒をご提供くださった酒造組合の皆様、そしてご来場のすべての皆様に、心より感謝を申し上げます。

北海道日本香港協会　事務局

春節のつどい2026開催

2026年に入り、北海道・札幌では例年にない記録的な大雪に見舞われました。空の便だけでなく鉄道の運行にも影響が及びましたが、2月4日から11日までの8日間開催された「第76回さっぽろ雪まつり」では穏やかな天候に恵まれ、来場者数は2019年以来7年ぶりに250



主催者・ご来賓の皆様と

万人を突破し、合計253万9,000人となりました。

日中の平均気温がプラスに転じ、春の陽気を感じさせる心地よい気候の中、3月5日にホテルモントレエーデルホフ札幌にて「春節のつどい2026」を香港貿易発展局との共催で開催いたしました。当協会石水会長の開会挨拶に続き、鈴木直道北海道知事からのご来賓挨拶を、北海道総合政策部山田哲史グローバル戦略推進監が代読されました。続いて、北海道経済産業局総務企画部の古川英晴部長の乾杯のご挨拶の後、昼食をとりながらのご歓談となりました。昼食終了後には、マキシム・グループMX Supply Chain社のケルビン・シャムサプライチェーン・マネージャーより、「香港フードビジネスにおける日本食品の動向と展望」についてご講演いただきました。講演では、日本から東南アジア地域への日本食を中心とした輸出事例や、香港における日本食ブーム、香港を起点とした東南アジア地域へのビジネス展開の可



石水創会長のご挨拶



マキシム・グループ MX Supply Chain社ケルビン・シャムサプライチェーン・マネージャーの講演

能性について解説いただきました。

その後、パネルディスカッションとして、「北海道産食品の香港市場向け販売取組の現状と今後の展開」について、北海道バイオインダストリーの村上季隆代表取締役、北一ミートの田村知巳取締役海外事業部部長、ベイクド・アルルの松江慎也営業本部部長の3名にご登壇いただき、香港貿易発展局伊東正裕東京事務所長の進行により、北海道から香港を中心とした東南アジア地域に展開されている食品等の輸出取組の現状などについてディスカッションが行われました。



パネルディスカッション

最後に、香港貿易発展局からのご案内があり、盛況のうちに会は終了となりました。北海道日本香港協会では、引き続き香港と北海道の観光やビジネスなど、交流の懸け橋として様々な取組を行ってまいります。

北海道日本香港協会 理事会を開催

北海道日本香港協会は3月5日に理事会を開催いたしました。以下の役員のもとで活動に取り組んでまいりますので、引き続きご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

〔役員〕

会　長	石水　創	石屋製菓代表取締役社長
副会長	加藤　修	札幌市副市長
副会長	佐藤友治	日本清酒代表取締役社長

宮城日本香港協会　事務局

2026春節セミナー＆パーティーを開催

宮城日本香港協会では、2026年の春節を祝し、春節セミナー＆パーティーをTKPセンターPREMIUM仙台西口にて開催いたしました。今年も多くの皆様にご参加いただきました。



当日は、第1部としてセミナーを実施しました。はじめに宮城日本香港協会小野寺会長より開会の挨拶があり、その後、アグリグローバルデザインの西川太郎代表取締役社長を講師にお迎えし、「アジア市場における日本食品・農林水産物の販売動向」をテーマにご講演いただきました。講演では、アジアにおける日本食市場の成長やインバウンド需要の拡大、現地消費者のライフスタイルの変化など、最新の市場動向を具体的な事例とともに紹介されました。また、ブランド力の重要性や企業連携の必要性、訪日時の食体験を活用した海外展開など、日本企業が海外市場で成功するためのポイントについても分かりやすい解説があり、参加者から高い関心が寄せられました。さらに、香港貿易発展局伊東正裕東京事務所長より、香港の最新ビジネス環境や今後の展望についてご案内があり、香港をゲートウェイとしたアジア展開の可能性について理解を深める貴重な機会となりました。

セミナー終了後には会場を移し、パーティーを開催しました。宮城県食品輸出促進協議会の久保田副会長の挨拶で幕を開け、当協会名誉顧問である村井知事の代理として出席された宮城県経済商工観光部の千坂副部長、郡仙台市長の代理としてご出席された仙台市経済局産業政策部の荒木田部長より祝辞を頂戴しました。続いて、宮城県議会の外崎浩子議員の音頭による乾杯をもって、和やかな雰囲気の中で交流がスタートしました。

今回は初めて参加された方も多く、会場では名刺交換やネットワーキングが活発に行われ、終始活気あふれる交流の場となりました。特に、香港およびアジア市場に関心を持つ企業同士の情報交換が盛んに行われ、今後のビジネス連携につながる有意義な機会となりました。会場には香港をイメージした装飾が施され、参加者の皆様には料理とともに香港の雰囲気をお楽しみいただきました。また、馬頭琴奏者のバヤラト氏による演奏が披露され、伝統的で力強い音色に大きな拍手が送られました。会場を大いに盛り上げたのが、メインイベントである「お楽しみ抽選会」です。協賛企業・関係団体の皆様より多数の景品をご提供いただき、充実した内容となりました。抽選のたびに歓声が上がり、会場は終始賑やかな雰囲気に包まれました。最後は濵田副会長による閉会の挨拶をもって、イベントは盛況のうちに幕を閉じました。あっという間に時間が過ぎ、参加者の皆様は景品を手に、笑顔で会場を後にしました。



広東語教室の春節パーティーを開催

2月22日午前11時より、広東語教室の荒川先生のお宅にて恒例の春節パーティーを開催しました。



当日は、宮城日本香港協会事務局より武田さん、ペギーさんをはじめ、行政書士の小林幸一さん、以前教室にご参加いただいた安達さん、小林由季さん、そして初参加のゲストの方々などや荒川先生のご主人もご同席のもと、総勢9名での開催となりました。

荒川先生の心のこもった手料理はどれも大変美味しく、参加者一同「美味しい」と感嘆の声を上げながら、香港の味を存分に堪能いたしました。香港の昔話やお茶にまつわる話題で大いに盛り上がり、食後には荒川先生特製の「香港ミルクティー」をいただきながら、和やかなひとときを過ごしました。今回は、香港出身の女性2名が初めて参加され、「料理の味がとても懐かしく、先生の香港時代の思い出話もあり、まるで香港にいるような気分で楽しい時間を過ごすことができました」と感想を語ってくださいました。気がつけばあっという間に夕方5時となり、名残を惜しみつつ再会を約して散会となりました。

次回もぜひ、香港に興味のある方や香港出身の方、香港をもっと知りたい方にご参加いただき、皆さまと楽しく交流できる場にしていきたいと思っております。

沖縄日本香港協会　事務局

春節･香港ビジネスセミナー 2026 in 沖縄　開催

3月2日、ホテルコレクティブにて春節・香港ビジネスセミナー2026 in 沖縄が開催され、会場には多くの参加者が集まりました。

本セミナーは、春節という節目を通じて沖縄・香港間の文化交流を促進し、経済や観光の各分野における互恵的なビジネスチャンスの創出を目的としています。開会にあたり、沖縄日本香港協会の金城会長より「本セミナーが香港と沖縄を結ぶ経済・文化の架け橋となり、新たな連携やビジネス創出へとつながる契機となるよう願っております」との挨拶がありました。



ウー・トクアキ・デニス氏の講演

続く講演会では、二つの視点から最新の市場動向が共有されました。まず、味珍味（香港）有限公司のウー・トクアキ・デニス代表取締役が、現地の食市場における沖縄食材の可能性を解説しました。香港は、中国本土の景気の後退やデフレの影響を受け、「北上消費」のように香港人の消費行動にも変化がみられますが、「食」に関しては、品質の高さと健康志向から日本食は依然として人気が高く、香港人の生活にも深く浸透しています。ただ商品の良さをアピールすることも重要で、SNSの活用やパッケージの工夫もこれまで以上に必要になってくる、と香港のマーケットにおける日本食の可能性について語りました。



春節セミナーの様子

続いて、香港貿易発展局大阪事務所の田中洋三次長より、最新の経済情勢と同局の活動内容が紹介された後、香港空港に隣接する複合商業施設であるスカイトピアのプロモーションビデオが上映されました。参加者は熱心に見入っていました。その後の交流会では、参加者同士が交流を深めました。

香港 M+　香港の新たな芸術拠点

香港の西九龍文化地区に開館した香港M+を訪問しました。

M+は一般に言う現代美術館ですが、従来の美術館を超えた「視覚文化の博物館」で、20～21世紀の現代視覚文化をテーマにした大規模な美術館となっています。現代絵画のみならず、視覚芸術、デザインと建築、映像メディアコレクションなどの展示を行っています。また、著名な建築チームであるヘルツォーク＆ド・ムーロンが設計した巨大な壁のようなモニターの外観は、高層建築が立ち並ぶ香港の景色を変えてしまうほどのインパクトがあります。M+のルーフテラスからの眺めも、普段見ているビクトリアハーバーの眺めとは違い、新たな香港を発見することができます。



新橋より移築された「きよ友」のカウンター

展示は、普段触れることが少ない香港や中国、アジアのアーティストが多くあり、日本のアーティスト・建築家の作品も多数展示されています。倉俣史朗がデザインした椅子「ミセスブランチ」の展示や新橋にあった寿司店「きよ友」の店舗がそのまま移築されています。また銀座にあったカプセル構造が特徴的な中銀カプセルタワーのカプセルや名作椅子など、日本人にも楽しくまた貴重な展示が多くあります。

M+の特徴は、香港や中国のみならずアジアの芸術作品を多く展示し、その価値を発掘・再認識することにあるように感じました。

西九龍文化地区には香港故宮文化博物館もあり、今後益々巨大なカルチャー・アートセンターとなっていくことが期待されます。

HIROSHIMA

広島日本香港協会　事務局

香港市場調査・香港広島県人会との交流会

広島日本香港協会は、昨年12月に香港で開催された「香港フォーラム2025」に現地にて当協会会員の方とも合流し参加しました。初日は、日本香港協会全国連合会役員会に佐伯副会長が出席し、他地域の皆様との交流を深めました。翌日は、香港フォーラムに参加後、当協会の事務局であるひろしま産業振興機構に海外ビジネスパートナーとして登録いただいている横藤田氏と、ランチミーティングと市内視察を行いました。毎週のように日本と香港を行き来され、長年、現地で活躍されていますので、様々な興味深いお話をお聞きしたほか、DON DON DONKI、そごう、セブンイレブンなどで香港における日本商品の取扱状態について市場調査を行いました。どの店舗にも、日本の商品は一定数販売スペースが確保され、日本製の品質への信頼も厚いことから、引き続き広島からの香港への展開を後押しすることに注力してまいりたいと感じたところです。



香港フォーラム

また、毎年恒例となっている香港広島県人会の皆様との交流会も開催しました。広島からの参加者をあわせて10名の参加をえて、香港や広島についての情報交換のほか、現地で活躍されている広島ゆかりの方々のお話に触れ、大いに刺激を受けたところです。今回は、香港在住歴・業種・年代も様々な方にご参加いただき、アグレッシブなパワーをたくさんいただいた気がいたします。皆様の広島への熱い思いが伝わる非常に有意義な時間を過ごすことができました。当協会としても、このご縁を大切に、引き続き、香港・広島の魅力を発信してまいります。


香港広島県人会との交流会

帰路の便では、一昨年運航を再開した、香港エクスプレスが運営する香港 - 広島直行便（週4便）に搭乗しましたが、ほぼ満席の乗客は香港の方が多い印象で、大変多くの香港の方に広島にお越しいただいていることを実感いたしました。今後とも観光・ビジネスと両面での交流を図っていけたらと考えております。

春節意見交換会・香港ビジネス相談

2月2日には、シェラトングランドホテル広島において、全国各地にある日本香港協会の中でトップバッターとして春節イベントの春節意見交換会を開催しました。意見交換会には香港貿易発展局のリッキー・フォン大阪事務所長や広島日本香港協会会長就任後初の参加となった松藤会長をはじめ、21名のご参加をいただきました。まず、DREAM CUBE山本雄彦代表取締役による「香港・アジアビジネスで成果を分ける初期判断のポイント」と題したセミナーを実施しました。セミナーでは最新の香港市場や、地方企業が“最初の一歩”を踏み出す現実的な方法について、分かりやすく説明いただきました。海外展開では対話ができることが重要で、香港はその対話の入り口に立つことが可能な市場であり、香港での経験が他の国の海外展開でも非常に役立ってくる等、実践に基づいたお話をしていただきました。



松藤会長挨拶

セミナー参加者からは、「香港展開に非常にやる気が出るとても良いお話だった。これからも香港市場に前向きに取り組んでいきたいと思った」等の感想をいただきました。その後、参加者の皆様と昼食をとりながら意見交換会が行われました。

春節意見交換会終了後は、広島の伝統産業の技術を活かした新たな取組についてのビジネス相談について、ご講演いただいた山本講師にご対応いただきました。広島から香港へのビジネスを展開するにあたり、非常に分かりやすく熱心にアドバイスをいただきました。


春節イベント後の香港ビジネス相談

引き続き、当協会では、会員の皆様と香港との相互理解と友好を促進し、経済の交流を図るための活動を展開してまいります。

新潟日本香港協会　事務局

第26回香港フォーラム2025へ参加して

2025年12月、香港コンベンション＆エキシビション・センターにおいて「第26回香港フォーラム2025」が開催され、新潟日本香港協会からは吉田会長をはじめ、新潟経済同友会、新潟クボタ、新潟農商、愛宕商事の総勢9名で参加いたしました。今回も、香港と強いビジネス関係を有するトレーダーやバイヤー、専門家をつなぐ国際的ネットワークによる重要なイベントとして、世界各国の参加者との交流を通じて、香港の最新動向と国際ビジネスの潮流を体感できる貴重な機会となりました。

フォーラム前日の12月1日には、ビクトリア・ハーバー・スプリームにて日本香港協会総会が開催され、日本香港協会関係者が一堂に会しました。続く日本香港協会全国交流会（前夜祭）では、日本国内の所属会員との再会や新たな出会いがあり、和やかな雰囲気の中で活発な情報交換が行われました。日頃の活動について意見を交わす中で、地域ごとの取り組みの違いや工夫に触れることができ、大変刺激を受けました。



新潟日本香港協会からの参加メンバー

フォーラム1日目のメインプレナリー「香港：グローバル市場を航海するための出発点」では、香港が持つ国際金融都市としての強みや柔軟性、そして変化の激しい世界情勢の中においてもなお重要なハブであり続けている理由について、改めて理解を深めることができました。特に印象的だったのは、香港が単なる中継地点ではなく、「価値を生み出す拠点」として進化し続けている点です。

続くテーマ別セッション「香港経済の創造的思考と戦略的イノベーション」では、スタートアップ支援やデジタル分野、サステナビリティといったテーマが取り上げられました。香港の企業や行政が積極的に新しい分野へ挑戦している姿勢に触れ、従来の枠にとらわれない発想の重要性を強く感じました。参加者同士のディスカッションも非常に活発で、異なるバックグラウンドを持つ方々との意見交換は、大きな学びとなりました。

2日目の地域分科会（アジア・オーストラリア地区）では、各地域の活動報告や課題が共有され、今後の連携の可能性について具体的な議論が行われました。特に、若い世代の参加促進や、ビジネス交流の深化に向けた取り組みについては、多くの示唆を得ることができました。新潟としても、地域の特性を活かした独自の活動をさらに発展させていく必要性を強く感じました。


香港フォーラムは再会や新たな出会いの場

また、アワード授賞式において、2025年5月に新潟で開催した「アジアフォーラムin新潟」が受賞するという大変光栄な機会にも恵まれました。この受賞は、これまで支えてくださった会員の皆様、関係機関の皆様のご協力の賜物であり、心より感謝申し上げます。同時に、この評価に甘んじることなく、今後もより一層充実した活動を展開していく責任を感じております。

昼食時の基調講演およびネットワーキングでは、各国の参加者と直接意見交換を行うことができ、現場感のある情報や実務的な視点を得る貴重な機会となりました。

今回の香港フォーラムへの参加を通じて、香港の持つダイナミズムと国際性、そして常に変化を恐れず挑戦し続ける姿勢に大きな刺激を受けました。同時に、新潟においても地域の魅力を活かしながら、より積極的に国際交流やビジネス連携を進めていく必要性を再認識いたしました。

今後は、本フォーラムで得られた知見やネットワークを活かし、会員の皆様にとって有益な活動を展開するとともに、地域社会の発展に寄与してまいりたいと存じます。引き続き、皆様のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。



アワード受賞式にて

KOCHI

高知日本香港協会　事務局長　横山 公大

春節セミナー

初夏のいい季節がやってまいりました。皆様いかがお過ごしでしょうか。

高知協会においては、去る2月25日、高知日本香港協会春節セミナーを会員企業である、老舗旅館三翠園にて開催いたしました。香港貿易発展局より、リッキー・フォン大阪事務所長、並びに田中洋三事務所次長をお招きし、今回の講師には、中医学博士であり健康風水師、そして高知日本香港協会特別顧問である、楊さちこ氏をお迎えし「香港人ってこんなん。その“食と健康”へのこだわりが、高知の可能性を拓く」と題し、約1時間のご講演を賜りました。



楊さちこ先生による講演

ご講演のキーワードは「おばちゃんと本物、冬の跳ねる養生、おなか痩せだけじゃない、腎が目覚める1分間」で、以下の内容です。

①変わる香港、気づいていますか？
②風水で読む180年ぶりの大転換期「第九運」のリアル
③香港の「今」を解剖する　～コロナが変えた日常～
④香港の「好き」から、高知の「勝ち方」を逆算する
⑤あなたの商品を香港仕様に翻訳してみよう

本講演のキーワード、「おばちゃんと本物」に、参加者から笑いが溢れましたが、まさに時代をキャッチし流行を発する、おばちゃんパワーを侮るなかれ。如何に女性を喜ばせる本物を創り出すか。この観点が非常に重要であると感じました。

楊さちこ先生曰く、おばちゃんの時代は2024年から始まった、風水に基づく180年ぶりの大転換期で、これから約20年続く火の時代です。それは活動的で明るいエネルギーが満ち溢れる時期とされており、過去を辿れば様々な変革が起きてきたと言われています。今だからこそ活動的にいろんなチャレンジが実る時期として大きな応援をいただきました。


春節セミナーの様子


森本前会長による懇親会乾杯の挨拶

また、参加者が持ち寄った自社商品を香港仕様にし、どうすれば香港での需要を高めることができるかを、1つずつレクチャーを受け、香港が求める価値は何？と深掘りをしながら、パッケージのデザインや商品の見せ方、季節感、限定感など、細かなアドバイスがあり、参加者からは大変高い評価をいただいた次第です。高知には高知にしかない工芸品も多く、特に土佐和紙などの地域ならではの工芸品を商品に混ぜ込むことは独自性が出て、非常に魅力的であるなど、地域の特性を活かした商品づくりへのアイデアもいただきました。



二次会も大いに盛り上がりました！

心強い特別顧問は、今後、香港への進出を目指す会員にとって、安心感のある存在であると改めて認識いたしました。紙面を通してではありますが、楊さちこ先生に対し、心から感謝を申し上げます。

よさこい高知文化祭2026

さて、高知におきましては、今年10月25日から12月6日まで、第41回国民文化祭、第26回全国障害者芸術・文化祭、通称「よさこい高知文化祭2026」が開催されます。天皇陛下御臨席のもと開幕する日本最大級の国民文化祭は、期間中、開催都道府県内において、各種文化活動を全国規模で発表、共演、交流する祭典であり、高知では初めての開催となります。ジャンルは多岐に渡り、音楽、美術、伝統芸能や伝統工芸、そして高知が誇る食文化など、きっと楽しんでいただけるものと考えております。秋の実りが深まり、豊穣を祝うイベントも多い高知県。この機会に是非とも足をお運びください。

松田会長就任から1年が経とうとしております。会員も少しずつ増加をしておりますので、引き続き協会発展のために努めてまいります。

間もなく夏を迎える季節。全国会員の皆さまにとっても良き季節をお迎えいただきますようご祈念いたします。



飛　龍

URL　https://www.jhks.gr.jp

日本香港協会全国連合会　電話（03）5210-5901
〒102-0083　千代田区麹町3-4-5　トラスティ麹町ビル6階
香港貿易発展局内

NPO法人日本香港協会（東京）　電話（03）5210-5870
〒102-0083　千代田区麹町3-4-5　トラスティ麹町ビル6階
香港貿易発展局内

関西日本香港協会　電話（06）4705-7030
〒541-0052　大阪市中央区安土町2-3-13　大阪国際ビルディング10階
香港貿易発展局内

中部日本香港協会　電話（0533）77-2468
〒441-0304　豊川市御津町佐脇浜3号地1-27　株式会社平松食品内

九州日本香港協会　電話（092）260-3748
〒810-8629　福岡市博多区中洲2丁目6-10　株式会社ふくや内

山形日本香港協会　電話（023）665-1310
〒990-2301　山形市蔵王温泉丈二田752-2
ユニテ蔵王ジョーニダ・リゾート内

北海道日本香港協会　電話（011）261-4288
〒060-8661　札幌市中央区大通西3-7
北洋銀行法人推進部海外ビジネス振興室内

宮城日本香港協会　電話（022）226-7025
〒980-0021　仙台市青葉区中央1丁目6-18　山一仙台中央ビル8階
株式会社Sola.com内

沖縄日本香港協会　電話（098）8686-3758
〒900-0033　那覇市久米2-2-10　中小企業振興会館3階
那覇商工会議所内

広島日本香港協会　電話（082）248-1400
〒730-0052　広島市中区千田町3-7-47　広島県情報プラザ3階
ひろしま産業振興機構　国際ビジネス支援センター内

新潟日本香港協会　電話（025）365-1250
〒951-8061　新潟市中央区西堀通七番町1574　ホテルイタリア軒地下1階
愛宕商事株式会社新潟本社　西堀通営業所（旅行事業部）内

高知日本香港協会　電話（088）855-9570
〒780-0056　高知市北本町4-4-7　パールマンション1301
株式会社オルトル内

真空パック

まぐろ(TUNA)シウマイ

新発売



魚が主役？！
豚肉を使わない新たな味わい。
真空パックまぐろ(TUNA)シウマイ。
最大6か月間保存可能。
海外へのお土産にも最適。

崎陽軒本店30周年



崎陽軒本店は、横浜駅東口に位置する、2026年に開業30周年を迎える複合型レストラン施設。中国料理、イタリア料理、ランチにシウマイの食べ放題が楽しめるビアレストラン、ティーサロンに加え、宴会場やチャペルを備え、名物のジャンボシウマイも人気。



崎陽軒

KIYOKEN



1908年に創立された日本・横浜の老舗。
主に神奈川や東京エリアの駅、駅ビル、羽田空港などに約160の販売拠点を展開しています。

横濱



鉄道旅行中には駅弁をお楽しみください！

右側のQRコードをスキャンして、崎陽軒をフォローし、最新情報をゲットしよう。

崎陽軒公式X
(旧Twitter)

LINE
(702scqyj)

Instagram
(Kiyokenoverseas)

小红书
(94148959081)